

乾選手がソロで日本勢初の2冠

水泳世界選手権

水泳の世界選手権大会はハンガリーのブダペストで開催され、乾友紀子選手がアーティスティックスイミング（AS）ソロのテクニカルルーティン（TR）とフリールーティン（FR）の2種目を制し、ASでは日本勢初の2冠に輝いた。アジア出身の選手としてもソロの金メダルは初めて。



FR決勝で演技する乾選手

ASは、決められた時間の範囲内で音楽や他の泳者に合わせて演技を行い、技の完成度や芸術性や表現力などを競う競技。ソロは1人で演技する。乾選手は6月18日のTRでまず優勝し、22日のFRでも完璧な演技で圧倒。時には酸欠を起こしそうになるほどの過酷なトレーニングを重ね、弱点と言われていた脚技を鍛えて頂点に立った。

31歳の乾選手は「来年の福岡での世界選手権にも出たい。まだまだ進化したらいいな」と話し、連続での金メダル獲得に目標を定めた。



TRで金メダルを獲得し、撮影に応じる乾選手(右)と井村雅代コーチ

東海大が男子6連覇、女子5人制は3連覇

柔道全日本学生優勝大会

団体戦で競う全日本学生柔道優勝大会は6月25日と26日に東京・日本武道館で行われ、東海大が男子は6大会連続26度目、女子5人制では3大会連続7度目の優勝を果たした。7人制で戦う男子の決勝の相手は、今年の全日本選手権で優勝した斉藤選手がいる国士舘大。7人が対戦した結果が1-1のため、決着は代表戦に持ち込まれ、主将の村尾三四郎選手が斉藤選手を縦四方固めで押さえ込み一本勝ちした。

斉藤選手より80キロも体重が軽い村尾選手が延長12分過ぎ、相手が仕掛けた大外刈りをかわしてうまく押さえ込んだ。村尾選手は「相手の体力を削って削った。その展開しか勝ち目は無いと思っていた」と笑顔で振り返った。女子の5人制の決勝では、龍谷大と対戦。最初の5人制で



男子決勝。代表戦の延長戦で、斉藤選手(下)を縦四方固めで一本勝ちした村尾選手

こちらも勝利でまず、代表戦で児玉ひかる選手が反則勝ちし、東海大が勝利を決めた。児玉選手は「絶対に投げてやる気持ちで臨んだ」が、なかなか技は決まらず。それでも攻め続けたことが勝利につながった。

開幕3カ月で4投手が無安打無得点

プロ野球史上79年ぶりの快挙

3月25日に開幕したプロ野球は、6月18日に山本由伸投手（オリックス）が西武を相手に史上86人目の無安打無得点試合を達成し、完全試合を含めこのシーズンだけで4人目の快挙となった。シーズン4人は1943年以来79年ぶりである。このときは日本が米国をはじめとした連合軍と戦争をしている第2次世界大戦の最中だった。

まず4月10日に佐々木朗希投手（ロッテ）がオリックス戦で28年ぶり史上16人目の完全試合。5月11日には東浜巨投手（ソフトバンク）が西武を相手に、6月7日に今永昇太投手（DeNA）が日本ハムを相手に無安打無得点試合を記録していた。

完全試合は投手が1人の走者も出塁させずに相手を0点に抑え込むこと。無安打無得点試合はフォアボールや味方の失



山本投手



今永投手



佐々木投手



東浜投手

策など安打以外で出塁を許したものの、得点は与えなかったケース。いずれも投手が最終回まで投げきり、その間に味方が得点して勝つ必要があり、引き分けでは成立しない。現役時代の1997年に無安打無得点試合を果たしている楽天の石井一久監督は「投手の方が努力できるバリエーションが多いかもしれない。球速を上げるトレーニングなど、いろいろのアプローチができる」と話し、投手が打者より進化しているとの見方を示した。かつては「飛ばないボール」で本塁打数が激減したこともあったが、日本野球機構は今年のボールについて、これまでと変わらないとしている。

今シーズンは各チーム80試合前後を消化して後半戦に入っただけだが、セ・リーグのヤクルトが3日に過去最速となるマジック「53」を点灯させ、2連覇へ向けて好調。パ・リーグはソフトバンク、楽天を軸に混戦模様となっている。

日本、フランスから初勝利ならず

ラグビー

来年のラグビー・ワールドカップ（フランス）で上位進出を目指す日本代表は、フランス代表とテストマッチ（国の代表チームによる国際試合）2連戦を行い、いずれも後半に失速して連敗し初勝利を逃した。通算対戦成績は日本の11敗1引き分け。

惜しかったのは9日の第2戦（東京・国立競技場）。世界ランキング3位のフランスに対し、同10位の日本は山中亮平選手が2つのトライ（5点）を奪うな

ど15-7とリードして前半を折り返した。

しかし、後半はペナルティゴール（3点）を2本決められ、日本はじりじりと追いつけられ、31分に守りのすきを突かれて逆転のトライ（ゴールも成功して7点）を許し15-20に。34分、日本は反撃し、テレビタタフ選手がインゴールへ突進。トライの判定が下されたが、ビデオ判定によりゴール内でのボール落球の反則でトライは取り消しとなった。

2日の第1戦（愛知・豊田スタジアム）は前半を13-13の同点で終え、後半への期待を膨らませたが、後半に4トライを許して23-42と突き放された。



第2戦。後半、攻める山中選手(左から2人目)

日本のジェイミー・ジョセフ・ヘッドコーチは「チームとしては残念な結果。後半にミスが増えてしまい、勝てる場面があったのに勝てなかった」と悔しさを隠さなかった。